

「24年度日本建築学会大会」を開催 能登半島地震災害緊急調査報告会

日本建築学会

24年度日本建築学会大会「関東」を実施した。同大会のメインテーマは「建築とくらす」で、この中の災害部門において緊急報告会「2024年能登半島地震 災害調査報告会」が同アカデミーコモンホールで行われた。

今年1月1日に起きた能登半島地震の発生を受け、同学会の災害委員会が北陸支部、災害連絡会と連携して「令和6年能登半島地震 災害調査ワーキンググループ」を発足し、振動の概要、構造別建物・基礎構造の被害状況などを調査。現時点で収集された結果を広く共有する目的で報告会を企画したものの。

同報告会では吉敷祥一氏

（東京工業大学教授）が、「鋼構造建物の被害」について発表した。調査チームは2～3月にかけて

珠洲市、能登町、輪島市などにある84棟（実際に鋼構造と判定されたのは輪島市の74棟）の建物を対象に調査・分析。東日本大震災、熊本地震と同様の被災区分で体系的に被害を把握した。

鋼構造建物の被害状況は、隅角部以外の天井筋交のたわみやボルト滑り、柱脚・トラス接合部の破断、柱の剪断破壊やひび割れ・曲げ破壊、非構造壁の破壊など、被災区分のうち「小破」「中破」「大破」が全体に広く分布しており、「倒壊」はなかった。これにつ



『能登半島地震 災害調査報告会』の模様

いて同氏は「建物の1階部分の多くがSRCであることが被害の拡大を抑えたのではないかと推測した。

また、脱落などがみられた外壁は、現在廃止されている不適切な取付方法が甚大な被害の原因であることと併せて指摘した。相対的には、これまでの地震と同様の構造被害を確認した一方、同地震被害の特徴として、海や川の近くの建物に、地盤変状による基礎構造の損傷が多く確認されたと報告した。

全ての報告の後、今回多く確認された傾斜被害を受け、登壇者全員に対して、基礎工事と地盤改良の関係などに関する質疑応答が行われた。